

放射線科学

IHE-J?

石垣 武男

この4月に3つの銀行が合併して新しく「みずほ銀行」が誕生しました。その時にコンピュータの不具合で窓口が大混乱し国民に大変迷惑をかけたことは記憶にあたることです。この原因は新聞・テレビで報道されているように3つの銀行がそれまで使っていたコンピュータのシステムが三者三様であり、それらをひとつにまとめられなかったことによるものです。それぞれが、従来自分の銀行が使っていたシステムを存続させることを主張したため、折り合いがつかず3つの異なるコンピュータ会社のシステムを繋げることで見切り発車したのです。ところが、この「つなげる」というのが曲者で、うまく整合性が合わなかったため大混乱となったのです。ひとつの銀行の系列内であれば同じ会社のコンピュータを使うので問題は生じないのですが…。

現在、コンピュータの社会への貢献はますます増大し、私達のまわりでも様々な場面でコンピュータが登場します。コンピュータは時々調子が悪くなります。新幹線の予約席が二重予約になったりするのもコンピュータのご機嫌が悪くなったためです。こういう場合はコンピュータによるシステム自体の問題なので内部処理でなんとか修復できます。しかし、前述のような製造会社の異なるコンピュータ同志をつなげるというのは、当然のようではなかなか簡単にはいかないことが多々あります。

医療の世界でもコンピュータ化が進んでいることは以前にも述べましたが、最近はますますそれが顕著になってきています。放射線科の領域ではレントゲンのフィルムをなくし、モニタ画面で写真を見て診断する「フィルムレス」時代に入りつつあります。患者さんの診療記録である「カルテ」も紙ではなく電子的にしまっておき、必要な時に呼び出してモニタで見るという「電子カルテ」への道を進んでいます。個人開業医ではすでに取り入れている医院もあります。厚生労働省は平成13年の末に「保健医療分野の情報化グランドデザイン」を打ち出しました。これによると、医療分野における様々な情報化が述べられています。電子カルテシステムについては平成18年度までに全国400床以上の病院の6割以上に普及させ、開業医でも6割以上に普及させるとしています。

たしかに、数年前と比べてもコンピュータの進歩は著しく、また情報を送るネットワークの容量も増大しています。10年前には画像を蓄積する専用の光磁気ディスクが1枚10万円もしたものが、同じ容量であれば現在では数千円で購入できる時代です。したがって、いわゆるIT化は着実に進んでいるわけです。こういう技術は相当のところまで来たこととなりますが、それでは製造会社が異なるコンピュータシステム同士を接続しようとするかどうかというすべてがすんなり行くわけでもありません。まさに、みずほ銀行の事例のようなことが色々な場面で生じる可能性がありますし、事実そうなのです。一つの会社の色々な機器同士の接続ではつながっても、用途が同じである別の会社の機器とはつながらなかったり、つながっても一部の情報のやりとりにも不具合が生じたりすることがあります。

医療の環境ではこういう不具合は診療に直接影響するので大変まずいこととなります。自分の会社のもの同士であればつながるのでそれを準備すればいいだろうという単純な思考では使用する側は困るわけであり、結局は各会社も損害を蒙るようになるわけです。そこで、電子カルテ化を進める段階でユーザと色々な会社が協調してこういった不具合を無くして行こうという動きが出てきました。アメリカでの動きが最初ですが、昨年からはわが国でもこの動きが始まりました。企業の独自性ばかり協調したのでは情報システムの普及に悪影響を及ぼし、結局は社会全体のためにならないという観点からの発想です。自分の会社だけもうかれればいいという発想では通用しないということです。これを情報の統合化に向けた連携(IHE, Integrating the Healthcare Enterprise)と呼んでいます。ここでは機器などのハードとハードとの接続という意味より、ソフトとソフトとの接続を強調しています。すなわち、時代は進んできて異種機器間の接続という問題より中味の接続の問題が前面に出てきたわけです。日本版であるIHE-Jは厚生労働省の「保健医療分野の情報化グランドデザイン」においても紹介され期待されているプロジェクトです。

(参照：<http://www.jira-net.or.jp/ihe-j/index.html>)

新しく情報システムを病院が購入しようとする場合、こういったシステムをどういう内容で要求したらいいのかということは簡単にはできない作業です。こういうことを指導できる専門家というのも日本ではほとんど育っていません。IHE-Jというプロジェクトが完成するとそういう時の手引書のようなものができあがり、システムを購入する際の手本となるわけで大変参考になると期待しています。

病院というところは時間もかかるし、どこへ行っていいのやら迷う場面が

多々あります。こういった状況を変えて快適な環境をもたらすためにも情報の統合と連携ということは縁の下の力持ち的な意味ではありますが非常に重要な課題であります。

(名古屋大学教授・医学部放射線医学教室)

